

山岳信仰と昔話

山の神

芦安地区では各集落でそれぞれの山の入り口などに山の神を祭った祠が建てられている。山へ入る時には安全を祈願し、山から無事帰った時には感謝の祈りが捧げられた。かつて沓沢では1月17日に山の神を祭る奉射祭を行っていた。数日後の1月21日はお西山とって、山の神が総出て山地を回り、強い弓を放って悪霊などを退散させ、山で働く人の安全を祈願すると考えられていたので、その日は山に入ってはいけない決まりであった。山の神という存在には人々が山を畏れ、敬い、感謝してきた記憶が留められている。



大石山の神

伝説～一つ目小僧～

木こりの太郎助は、村の衆と山小屋に泊り込んで山仕事をしていました。12月のお松節句の頃(13日)になると、仲間はずいぶん早く正月準備のため村へ帰りましたが、働き者の太郎助は、もっと稼ごうと一人残ることにしました。一人きりの山小屋で夜をむかえと、そこに満月のような目がひとつ、口は耳もとまで裂けた一つ目小僧が現れ、「今夜のおかずはなんだ」と声にしなが、一晩中小屋の周りをうろつきまわりました。太郎助は怯えながら夜を明かし、朝一目散に村へ逃げ帰りました。しかしあまりの怖さから太郎助は亡くなってしまいました。村の人々は欲張りの太郎助を一つ目小僧がこらしめたのだと言ったそうです。なんだか太郎助がかわいそうですが、この昔話は太郎助が欲張ったことを戒めてるわけではありません。12月13日頃は山の神様が移動する日とも考えられ、この日は山に入ってはいけないという大事な山の掟を伝える昔話なのです。

伝説～夜叉神のたたり～

御勅使川の上流に住む夜叉神という神さまは、体が大きく身軽で、日照りを続けたり、大雨を降らせたりして村人を困らせていました。ある夏、夜叉神さまは荒れ狂ったように大雨を降らせて、御勅使川の大洪水を引き起こし、甲府盆地全体を湖のようにしてしまいました。たいへん困った村人たちが峠に夜叉神の祠を建ててお祭りすると、たたりもなくなり、その後は山の守り神になったということです。

コラム Column

虎御前伝説 曾我物語悲劇のヒロイン



虎御前 (曾我物語図会 歌川広重)

父親を殺された幼き兄弟、兄十郎と弟五郎が成長し、見事仇の工藤祐経を討ち果たす『曾我物語』。日本三大仇討ちにも数えられました。この物語の主人公の一人、曾我十郎祐成には物語のヒロインである虎御前という恋人がいました。虎御前は芦安の安通生まれとも伝えられ、幼いころから美人と評判でした。縁あって、大磯にあ



曾我兄弟と工藤祐経 (曾我物語図会 歌川広重)

道祖神とどんど焼き

道祖神・塞の神

沓沢、大曾利、小曾利の各集落には丸石や自然石の道祖神が祭られている。道祖神は道陸神(どうろくじん)や塞の神(さいのかみ)とも呼ばれ、集落へ入る悪霊を防いでくれたり、五穀豊穡や多産の願いを叶えてくれる身近な神様として信仰されてきた。

- ⑦沓沢道祖神
- ⑧大曾利道祖神
- ⑩小曾利道祖神



どんど焼き

小正月に行われる道祖神の祭りがどんど焼きである。旧年の縁起物とともに焼くオコヤは、その土地それぞれの個性がある。山に近い沓沢では木材で作られるが、小曾利では竹が使われている。どんど焼きの時には、厄除けとしてヌルデの木を削り、顔を描いた「オホンダレサマ」も作られる。子宝への願いとしてヌルデの木で男根型の飾りも作られ、道祖神に奉納される。



小曾利のオコヤ 沓沢のオコヤとどんど焼き

伝説～道祖神と厄病神～

厄病神は毎年次の年に病気になる人を記した帳面を、正月は出かけるからと言って道祖神に預けます。道祖神はその帳面をどんど焼きの時に燃やしてしまい、村人の健康を守るのでした。燃やされてしまうのになぜ厄病神は毎年道祖神に帳面を預けるのでしょうか。

る料亭の幼女となり、その後十郎と恋仲になったのです。虎御前は、仇討ちの後討ち取られた十郎の訃報を聞き、その悲しさのあまり尼となり、兄弟の菩提をとむらう旅に出ます。信濃善光寺に向かう途中、安通村へ立ち寄ったところ、村人からお薬師様を改装した住居を差し出され、その思いやりに感謝しながら追善供養を続けたといわれています。伊豆神社の近くには、虎御前が鏡を立てて化粧をしたという大きな石があり、村人はいつしか「虎御前の鏡立石」と呼ぶようになりました。大曾利の諏訪神社には十郎と虎御前を彫刻したと伝えられる木像が納められています。



虎御前の鏡立石



伝曾我十郎・伝虎御前の木像(市指定文化財)

山と生きる

いにしえから現代まで、芦安のくらしは山とともにあった。芦安の主要な生業は昭和30年代頃まで林業で、男性は野呂川などの奥地に入り、泊まり込みで木材の伐採と搬出を行い、冬期には炭焼きなどを行ってきた。女性は日用品を男性に届け、帰りには約50kgもある炭俵などの生産物を里まで運搬した。里近くの山の斜面では明治期まで焼畑が行われていたが、現在では集落名「曾利(そうり)」と呼ばれる焼畑の休耕地の名称にのみその面影を留めている。村田銃を使った熊や鹿、カモシカなどの狩猟も盛んで、カモシカ猟のパートナーとして甲斐犬が活躍した。



上:伐採 切り出された木材は建築用材や薪炭、桶や下駄、曲物の原材料となった。



左:修羅出し 丸木を橋のように並べ、その上に原木をのせ、木方送っていく。雨の日にはすべりがよくなり、踊るように原木が下っていったという。



運搬 男たちの仕事場である奥山へ日用品や食料を届け、帰りに炭やまきなどを運ぶのは女性の役目でもあった。



輪かんじき 雪山を歩くための道具。初めはフジソルなどで外枠が作られたが、後に檜の枝が使われた。1万足以上が生産され、登山者に好評であった。



信仰と伝説に彩られた山里を歩く



くわしくは芦安山岳めぐり! 「Mなび」にも携帯でアクセス!

深山の伝説に誘う旅へ